

脳血管内治療を受ける患者の術前オリエンテーションに使用する 脳血管内治療用パンフレットの効果

キーワード：手術・不安・脳

1 病棟 9 階西

田中香織 山本恭子 佐藤恵美子 實田育美 原野純礼 宮武順子

I. はじめに

脳神経外科領域における診断・治療技術の進歩により、脳血管内治療を受ける患者の数は年々増加傾向にある。2007年、本院にて脳血管内治療を受けた患者は87名、そのうち予定入院において治療を受けた患者は60名であった。

当病棟で予定入院にて脳血管内治療を受ける患者は入院から治療まで3日前後と短期間であり、患者と看護師が密接に関わる機会は少ない。さらに、治療前日に看護師からのオリエンテーションを行っており、治療に対する患者の不安を十分に把握し介入するには困難である。また、脳血管造影検査用のパンフレット（以後「検査用パンフレット」とする）を用いてオリエンテーションを行っているのが現状である。そこで今回、患者の理解度、不安軽減効果を高めることを目的に、新たに脳血管内治療用パンフレット（以後「治療用パンフレット」とする）を作成、実際に使用した。そこで双方における、患者の治療に対する理解度、不安軽減効果について比較・検討した。

II. 研究目的

入院から治療までの限られた期間の中で検査用パンフレット使用患者と比較し、治療用パンフレット使用患者の治療に対する理解度がより高まり、あいまいさ・未知のことに対する不安の不安軽減効果が得られる。

III. 研究方法

1 期間：平成19年6月15日から11月30日。

2 対象者

(1)従来使用していた検査用パンフレット使用患者：脳血管内治療を受ける Japan Coma Scale (JCS) の判定において意識清明の患者8名（男性6名、女性2名）。平均年齢61.1歳（A群）。

(2)新たに作成した治療用パンフレット使用患者：脳血管内治療を受ける JCS の判定において意識清明の患者8名（男性6名、女性2名）。平均年齢60.4歳（B群）。

3 方法

(1)治療用パンフレットの作成。

(2)入院時（または治療の前々日）研究についての説明を行い、同意を得る。

(3)治療前日

①オリエンテーションの直前：STAI(状態不安・特性不安)の記入。

②パンフレットを用いオリエンテーション施行。

③オリエンテーション後：STAI(状態不安)の記入。

(4)治療後3日目以降、ADLが自立した時点で独自で作成のアンケート調査を行う（各質問項目において二者択一、自由記載欄、5段階評価における回答欄を設ける）。

(5)STAIの分析方法：オリエンテーション前後での状態不安・特性不安の得点を計算、状態不安の前後差にて不安軽減効果の有無を検討する。アンケートの分析方法：5段階評価欄においては各項目における平均点を算出し前後差を比較する。また、自由記載欄の内容を元に考察する。

4. 倫理的配慮

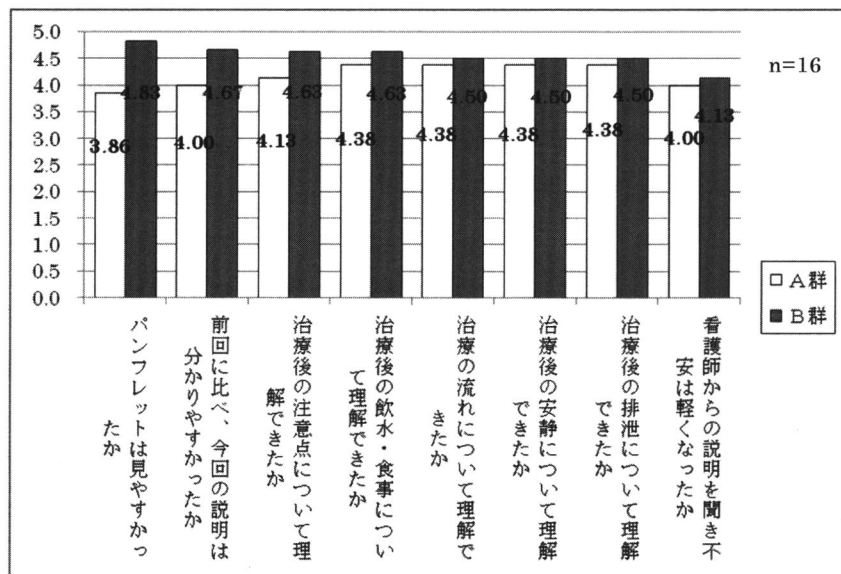
本研究への協力は被験者の自由意志にて決定し、協力の有無に関わらず今後の治療や看護に影響がないこと、途中中断も可能であることを説明する。また、得られたデータは本研究以外に使用しないこと、個人が特定されないよう配慮すること、研究実施にかかわるデータや同意書を取り扱う際は被験者の秘密保護に十分配慮することを約束する。以上のことを口頭および書面にて説明し、同意の得られた者に対して実施した。

IV. 結果

特性不安・状態不安における不安の段階には1から5まであり、段階1を低不安、段階5を高不安としている。STAI特性不安における平均点はA群44.5、B群42.8と共に不安度は段階2であった。オリエンテーション前後のSTAI状態不安の平均は、A群：前44.5、後45.4、前後差+0.88、B群：前平均40.1、後平均39.3、前後差-0.88。A群・B群共にオリエンテーション前後で大差はなかった。

アンケート調査における5段階評価において「パンフレットは見やすかったか」との質問に対し、A群平均3.86、B群平均4.83であった。治療用パンフレットが見やすい理由としては「絵が入っている」が挙げられた。また、「パンフレットは役立ったか」という質問に対し、A群では「はい」7名、「いいえ」1名、B群では対象者全員が「はい」と答えた。A群で「いいえ」と答えた理由としては「パンフレットは役立ったが、医師や看護師の言葉の方が効果的だった」という内容が挙げられた。また、B群でパンフレットが役立った理由としては「理由の記載がある」「(治療)前日・当日・治療後に分けて書いてある」等の意見があった。視覚

障害患者においては「パンフレットの文字が小さく見づらい」との意見も聞かれた。「前回の治療・検査の説明に比べ、今回の治療の説明は分かりやすかったか」という質問に対し、A群平均4.00、B群平均4.67であった。「治療後の注意点について理解できたか」という質問に対し、A群平均4.13、B群平均4.63であ



った。また「治療後の飲水・食事について理解できたか」という質問に対し、A群平均 4.38、B群平均 4.63、「治療の流れ・治療後の安静・治療後の排泄について理解できたか」という質問に対し、それぞれの項目において A群平均 4.38、B群平均 4.50 であった。「看護師からの説明を聞くことで不安は軽くなったか」という質問に対し、A群平均 4.00、B群平均 4.13 と大差はなかった。

アンケート調査にて、患者の理解度・不安軽減効果はいずれの項目においても B群の方が高得点であった。

V. 考察

治療前の患者が抱える不安の内容・程度は個々によって様々である。治療用パンフレットの効果で期待することは、治療前後の処置や治療に対する患者の理解度を向上させ、不安を軽減することである。しかし、今回の研究では伊藤らの言う不安¹⁾のうち、「VIあいまいさ・未知のことに対する不安¹⁾」に焦点を絞り、介入している状況である。そのため、患者の抱える不安全般を反映する指標である STAI の結果として、状態不安のオリエンテーションの前後差として得点に表れなかったと考える。

今回、治療用パンフレットを作成するにあたり工夫した点は①挿絵を入れ図表を用いたこと、②治療前に行う処置に理由を記載したこと、③治療中・治療後の流れとその理由を記載したことである。挿絵や図表を用いたことで処置についてより視覚的に捉えることができ、処置とその理由について知ることで患者はより具体的に治療についてイメージできたと考えられる。アンケート調査の結果からも、パンフレットが役立つ理由として前述①～③と同様の内容があげられ、全ての質問項目において A群より B群の平均点が高かったことから、治療用パンフレットを用いオリエンテーションを行ったことで、治療に対する理解度がより高まったと考えられる。その結果、伊藤らの言う「あいまいさ・未知のことに対する不安¹⁾」の軽減につながったのではないかと考える。

以上のことを踏まえ、治療用パンフレットを用いてオリエンテーションを行ったことは、患者の理解を高めるという点で有効的であったと言え、「あいまいさ・未知のことに対する不安」の軽減にも効果的であったと考える。

VI. 結論

1. 治療用パンフレットを用いオリエンテーションを行ったことで、患者の治療に対する理解を高めることができた。
2. 患者の理解を高めることであいまいさ・未知のことに対する不安の軽減につながった。

VII. 引用・参考文献

- 1) 伊藤まゆみ：開頭術を受ける患者の術前不安の推移と特徴，群馬大学医学部保健学科紀要，p97-102，1999.
- 2) 肥田野直，福原眞知子，岩脇三良ら他：新版 STAI マニュアル，実務教育出版，2000.
- 3) 緒方有里：脊椎疾患患者の手術前の不安と決意，第 36 回 成人看護 I，p18-20，2005.
- 4) 杉野欽吾：臨床看護研究入門第 2 版，医学書院，2001.